

れるので、身を守るため頭の髪を剃り丸坊主になり、男装をして身を隠し、死に物狂いで逃げ廻り、生き延びてきたとのことだった。当時のあの苦労は書き表せるものではない。これからも戦争は絶対にしないで欲しい。

四十七年前、結婚したときは、満州の広野で開拓をし、頑張って幸福にしてあげると約束し連れて行ったのに私は妻を裏切ってしまったことになる。開拓で得た財産と、子供を戦争に奪われてしまったことはとても残念であり無念である。

私は妻の待っている北海道開拓に希望を抱き、十勝郡の足寄地区の柏倉開拓団に入り妻と二人で大森林を伐採して抜根、一畝々々掘り起こして開墾し、十五年間畑作営農を続けて暮してきた。満州開拓とは違い並大抵の苦労ではなかった。秋の稔り頃には鹿が出てきて、丹精こめて作った作物が荒らされ、夜は時折り熊が部落に降りてきては、羊や豚を抱えて持っていかれたこともあった。恐ろしさで何時もびくびくしその不安が続いた。そこで私は三十六年の春三月、見切りをつけ、柏倉開拓団を離農することを決心した。妻と女の子二人を連れて山

形へ帰り、妻と共に会社勤めをして生計を立て三人の子供を育てあげた。娘たちはそれぞれ結婚し、孫も出来たが、私の人生は苦労の連続だった。しかし人間は苦労してこそ、初めて幸福を知ることが出来るんだなとつくづく感じている七十五歳の人生である。

ああ、父よ母よ満州よ

大阪府 西岡 智恵子

一九二七年、大連市満鉄社宅で出生。

三三年四月、大連霞小学校へ入学（新設校）三四年八月、満州国奉天敷島小学校へ転校。父が新生満州国に招へいされて転職のため、三六年八月、旅順師範学校付属小学校へ転校。四四年九月、旅順満州第七七部隊へ軍属として勤め始めた。

徴兵年齢引上げのため、学校の街だった新市街から学生の姿が減り、中学生も動員されて、周水子などの工場で働かされるようになった。街はガランとした感じにな

り、軍服ばかり目立つようになった。

四五年八月、終戦のため部隊は解散。同年九月四日朝、自宅はソ連軍司令官住宅として突然接収された。前日、父が手配してひそかにトラック三台のわずかな荷物を搬出していたほか、何も持ち出せず、着のみのまま追い出された。坂の下の道路は、ソ連の戦車や歩兵の隊列が切れ目なく新市街へ向かっているし、付近は兵隊だらけで、近所の邸宅に逃げこめそうもなく、葉が落ち始めたアカシアの疎林にひそみ、周囲をうかがいながら時を待った。夕闇にまぎれて荷物の疎開先、新市街の陸軍官舎に着くと、そこはソ連軍の駐屯地が集結地の傍だった。足の踏場もない荷物の中で一息つくくと、ソ連軍はますます数を増やし、つきつき到着しているようす。勝手知らぬ所で扉を叩く音に息をひそめ、裏庭の高梁畑に逃げこんだりして、父が片言のロシア語でソ連兵をうまくあしらって追返すのを待った。夜半にやっと浅い眠りについたと思ったら早朝にはそこも接収のため立退きとなり、急仕立ての荷馬車の中国人に法外な料金を要求されるでも仕方なく、新市街から追い立てられた。

両親と姉弟、あわせて五人と当座の荷物を置く所を求めて一か月の間に五回も転々とするうちに、倉庫に預けていた上質の衣類から盗まれ、転居先ではソ連兵のちん入におびえる日々が続いた。当時十八歳で、やせていた私には、父に髪を坊ちゃん刈りのように切られて男装とまった。

四五年十月、占領軍の命令で旅順の日本人はすべて立ち退きとなり、冬に備えて出来るかぎりの荷物を運ぶため、トラックを調達し、大連へ向かった。

大連には奥地からの避難日本人婦女子が、悲惨な状態でたどり着いている、と聞いた。

四六年一月、大連省政府土地調査課(旧大連西稅務署)にアルバイトとしてつとめた。終戦のさい、処分した土地台帳、地図など焼失分の再作成その他の事務に従事。周囲の日本人がしだいにひっ迫した生活にはいつているときに、暖かく広い事務室で筆耕のような仕事をし、大食堂で昼食が支給されることがうしろめたく、厨房から流れてきた中華料理の匂いを今もよく思い出す。それからは、ソ連高級将校等に手持ちの大きなテールブルクロ

ス、ベッドカバーなど目ぼしい品をつぎつぎと売り、他は委託販売をしていた知人に頼んで売り食いの生活となっていた。

四六年九月、半年以上も父のせきが止まらず、母が強引に大連病院へ受診に同行した所、即刻結核病棟に入院となった。やがて生活困窮者から引揚げが始まり、日本人の居住区域も狭くなり、転々としているうち、寄留先の日本人宅は周囲も皆引揚げてしまい、居住証明が得られぬ無籍者の状態になってしまった。

四七年二月四日、父が安らかに永眠した。四七年三月、最後の引揚げ船高砂丸にやっと乗船。待機中も、ソ連兵に手荷物をうばわれた。

四七年五月、『佐世保一復調履第一一五号 解備証明書』を受取り、元陸軍備人山下智恵子は戦争から解散された。しかし、生活の戦いは日本上陸から始まったのだった。父の親族はすでに亡く、母の親兄弟は明治末期には大連で永住の構えでいたし、そのうち、当時は技術者として強制残留の身分で首信不通だった。以前、父母を頼んでさんさん世話になった知人縁者は、引揚げた者

には迷感げに距離を置く白々しい態度で、温和な母もさすがに腹にすえかねることばかりであったようだ。母が和裁や手芸を教えたり、内職に仕立物をし、私はタイプピストとなって、復学した弟との生活が始まった。やがて学制改革となり、弟は旧制中学から新制高校、大学と進学。

五二年八月、西岡信行と結婚。夫は大連引揚げ者であった。

五七年九月、夫の転勤に従い、九州、山陰をへて大阪に転居。娘はこの年二月に雪深い勤務地で生まれた。

五九年四月、大阪で男児誕生した。

六五年三月、前年春から手術や入院を繰り返した甲斐もなく、夫がガンで死去し、未だ幼い子ども達と残った私は、遠い前途に暗然となった。パートのタイピストや事務員をしたが、将来性がないためいろいろ模索を続けた。

六七年三月、ある会社の経理事務員となった。老後は趣味を楽しみながら悠々自適の生活に入るはずだった両親。海を見おろす小高い丘が墓地の予定だったが、希望

の『満州の土になる』ことはできなかった。

ようやく親孝行の真似ごとでもできそうになったいま、すでに父母はいない。

生死の幾山河

北海道 平木重男

昭和十五年茂兄が満州警察として渡り十八年北大農学部出身の貝沼洋二団長と知合い、退官後、東安県哈達河開拓団本部に勤務する。

当時札幌市定山溪石切山南の沢在住の農学部出、佐藤先生と貝沼団長の開拓要望を受け長兄は土地家屋を売却して家財農機具一式貨車輸送し私も鉄道を退職し父とともに家族七人で渡満する。哈達河開拓団には五月初旬に到着、団員の歓迎を受け翌日茂兄が用意した家に落ち着く。先に送金してあり農耕馬三頭購入済みで着任早々北海道農機具の全面的活動となり団員や満人達が見学にくるようになった。

私は翌年三月東安街で兵隊検査を受け牡丹江興隆歩兵部隊に入隊、七月初旬に突如移動命令で深夜列車に乗り込む。窓は幕でおおわれ監禁状態で三日間走りやっと停車したのが新京、行き先不明でまた南下して到着したところは安東省風城駅に各中隊は分散して葉煙草倉庫を仮兵舎に駐屯、南方八キロ地点の山で散兵壕を掘り、私は指揮班に配属、三分哨に分け谷間に糧秣、弾薬、被服を隠してその警備につく。夜中動哨のとき、月光ははえ真昼のごとく風の音と樹木の揺れが不気味であった。

八月十日以後のこと、本隊との伝令で歩いていた時交際のあった支那人に、やがて敗戦となりお前達部隊は安東で武装解除されシベリアに連行されると話を聞く。

後日部隊は深夜十一時風城駅集結となり、その夜、義勇軍で渡満し妻子ある召集兵の斉藤吉右エ門(二等兵)と逃亡し、教えてくれた支那人宅に隠れていたが別人に密告され家族に迷惑をかけられず山中で軍服銃剣を焼去、貰い服に替え半月逃げ延びる。

九月上旬暴民に襲われまる裸になり山を下って風城難民收容所に入る。沼田尼会長に五龍開拓団へ秋の取り入